



俯瞰から建物の全体を見る。川辺に面した西面と、商店街に面した南面に外壁の外側に窓を取り付け、建物の活動が外と関係付けられる。



南面から見る。元々隠されていた構造躯体を露わにし、その外側に波板とアルミサッシで包みこんだ / 旧商店街から建物を見る。道と川辺の2つのレベルに引き違いサッシを設けた。

川辺と道の窓をもつ家

過疎化が進行する愛知県豊田市稲武町の地域の再興の拠点となるゲストハウスのための、築100年をこえる木造3階建の改修計画。稲武町は塩の道とよばれる中馬街道（現国道153号）と岐阜県中津川から静岡県浜松へと向かう秋葉詣街道（現国道257号）が交差する場所にあったため、江戸時代には宿場町として栄えていた。計画敷地は中馬街道沿いに位置しており、名倉川の川辺に面している地面と、旧商店街の道に面している地面の、2つのレベルをまたぐように建てられていた。川辺にはかつての大火を防いだといういわれのある大きなイチョウの木や、木橋跡の石垣があり、古くからの外構が残っていた。

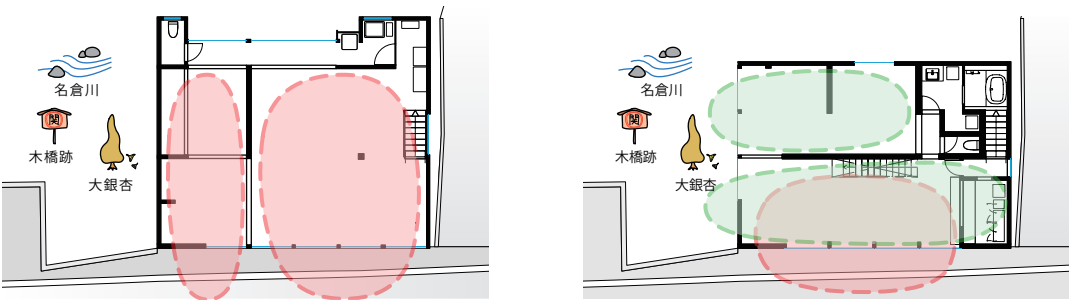
旧商店街は、もともと宿場町であったことから、道に沿うように平入で建てられ、本物件を含め、通りに対して開口部を設けていた。自然環境の豊かな川辺と、人の行き交う道沿いの、それぞれの環境と本物件がつながり、本物件を通して道と川辺の環境をつなげることができないかと考えた。

計画物件は道に対して直行するように縦割の平面構成で、道側のみ意識された平面計画であった。そこで、川辺に面する建物西面に既存躯体の外側にサッシを設け、プランを横割にすることで、ゲストハウスの空間から川辺に残る古くからの外構や、自然の風景を感じられるように計画をした。また、道側と川側に開かれた構成により、旧商店街を通りゆく地元の方、エントランスで休憩している自転車乗り、ゲストハウスでくつろいでいるお客さん、工房で家具を制作している事業者さん、川辺で遊ぶ子どもたちといった、多様な人々をつなげるきっかけを与える。

かつての宿場町のように、この建物が中馬街道を行き交う人々を引き留め、人と人の関わりをつくる結節点としての役割を持つ場所になればと考えている。

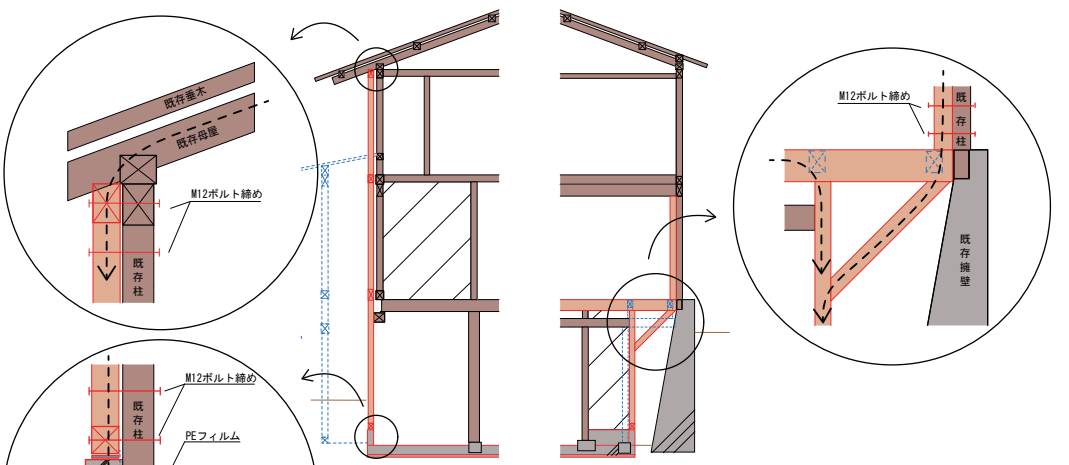
～宿場町の再興を楽しむ～

計画から施工まで建築主・住まい手・施工者・設計者が和気あいあいと打ち合わせを重ね、一部の工事では自主施工も行うことで、関係者全員の当事者意識が高まり、愛着と魂のこもった物件となった。近隣の方々と巻き込んだ企画会議の様子。模型を囲んだ建築計画の打ち合わせの様子。内壁のOS塗装ワークショップの様子。



旧商店街 改修前 軸の読み替え 改修後

元々、道路面に対してのみに軸があった既存建築の軸を読み替え、擁壁下の川辺の有する自然環境の魅力を生かして引き込んだ



2Fの床と南側の壁は既存の脆弱な擁壁に支えられていたため、方柱を持ち出した耐力壁で受け直した。傾いていた増築部分は減築し、既存の躯体に耐力壁を添え、補強を行った。

東右から梁下桁まで、既存の構造躯体を残したまま、基礎・壁・床の構造補強を行った。



既存時の外観を見る。様々な年代に手に加えられ、継ぎ接ぎな状態であった。



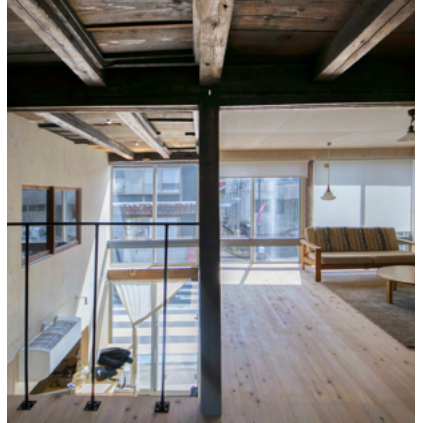
既存時の1Fを見る。既存構造躯体は場当たり的に補修がされ、接合部が極めて脆弱な状態であった。



場当たりにつくられた本物件は、かつての住まい手の工夫が多くみられた。今後も良い意味で場当たり的に内部空間をつくっていくよう、桧化粧構造用合板をそのまま残した。



2Fの客室を見る。1Fの家具工房で作られた家具を実際に泊まって体験できる客室となっている。



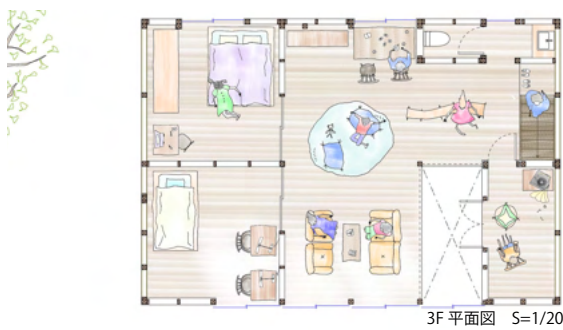
3Fの南面を見る。窓台は改修後も残り、窓辺の姿を引き継いでいる。



1F 平面配置図 S=1/200



2F 平面図 S=1/200



3F 平面図 S=1/200



立面図 / 断面図 S=1/40



断面図 S=1/200